

2 コラム RAMPWAY  
泉 麻人

特集 **そして未来へ**

- 5 **新たな価値の創造**  
特別対談  
首都高速道路株式会社 初代表取締役社長  
**橋本鋼太郎**  
首都高速道路株式会社 代表取締役社長  
菅原秀夫
- 10 **都市高速のあるべき姿**  
モータージャーナリスト/ノンフィクション作家  
岩貞るみこ
- 13 データ物語  
約50年の月日を経て完成!  
中央環状線のインパクト!
- 14 Taste of the Season  
森下典子
- 16 **首都高HEADLINE**
- 18 business essay  
「承認」が挑戦意欲を引き出す  
同志社大学 政策学部 教授  
**太田 肇**
- 20 つくる人まもる人  
首都高速道路株式会社  
**金井 直**
- 22 高速百景 **中野正貴**

cover photo by Minoru Saito  
contents produced by  
Metropolitan Expressway Company Limited



illustration by Takao Nakagawa

column | RAMPWAY 22

首都高名所案内

飯田橋原風景と  
神楽坂散歩

コラムニスト  
泉 麻人

小学校に上がるかどうかの幼い頃の記憶のなかに、東京駅あるいは銀座あたりから、目白の先のわが家までタクシーに乗って帰ってくるときの光景がぼんやりと刻まれている。当時大阪に単身赴任していたおじいちゃんを東京駅まで出迎えに行ったときとか、銀座のデパートで大きな買い物をしたときとか、減多にない特別なケースだったこともあって、刺激が強く残っている

のかもしれない。

思い浮かんでくるのは、日も暮れた夕刻の景色。皇居の森と大手町あたりの地味なビル街がしばらく続いて、ちよつと飽きてきた頃に商店の灯がちらちら目につく、にぎやかな交差点に差しかかる。銀座のような高いビルはなく、店頭で野菜や果物を出した素朴な八百屋とか、安っぽい赤ネオンを灯した中華料理屋とかが並んでいた。僕

らが家路へ向かう目白通りは、そこを過ぎるとまた江戸川に沿った暗い区間に入っていく。まだ首都高も出来ていない、東京オリンピックよりちょっと前の風景だろう。いまま飯田橋の交差点にやってくると、そんなタクシーの窓越しに見た懐かしい夜景を思い浮かべる。

飯田橋というと、このところはもっぱら神楽坂界隈へ足を向けることが多い。外濠の西方、新宿区側の坂道に続く神楽坂の商店筋の源は坂上に位置する善國寺の毘沙門天。江戸の頃からその門前町としてにぎわっていたが、一段と店が増えたのは大正の関東大震災の後という。震災後の東京の街並を熱心に調査研究した建築学者・今和次郎の名著『新版大東京案内』（昭和4年）には、このように解説されている。

「大震災直後、幸運にも火災から免れたばかりに、三越の分店、松屋の臨時売場、銀座の村松時計店と資生堂の書店ではカフェ・プランタン等々、一夜に失はれた下町の繁華が一手に押し寄せた観があった」

現在の店の顔ぶれとはまた違うが、震災後の昭和初頭、銀座の名店が一時的に移設され（山の手銀座）なんて俗称も付いた。

僕が飲み食いに掛けるようになったのは、80年代の終わり頃からだ。この時期から古い石畳の路地や花街の雰囲気をおもしろがって、それまで六本木や赤坂に店を出していたフレンチやイタリアン、あるいはデイスコ、ショットバーなどの経営者が神楽坂に出店を試みる。そういったトレンド店で長続きしている所は少ないけれど、近頃は大久保通りの先の赤城神社の周辺まで、小ジャレたカフェや小物の店が見受けられるようになった。バブル時代の神楽坂にフレンチやバーを出した人は「アンチ六本木」的な意識を持っていたのかもしれないが、最近の若いカフェのオーナーにそういう「力み」は感じられない。坂や路地の街並が気に入っている人々が、ごく自然にくつろいでいる感じが伝わってくる。

神楽坂の横路地をくねくね巡って、赤城神社裏の急坂を下り印刷工場の並ぶ江戸川橋へ抜ける……なんてのが近頃の僕の散歩コースだ。

いずみ あさと / 1956年、東京都新宿区生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。79年、東京ニュース通信社に入社。「週刊TVガイド」などの編集者を経て、フリーのコラムニスト。近著に『大東京23区散歩』（講談社）がある。